

# ユーゴスラヴィア国家の基本問題

材 木 和 雄

## 1 問題の所在

ユーゴスラヴィアとは「南スラヴ人の国」を意味する。地理的にはヨーロッパの南東部、バルカン半島中西部に広がる地域を指す言葉であり、そこにはスラヴ語系の言語を話す人びとが多く住んでいる。このうち主要な民族であるセルビア人とクロアチア人はほぼ同じ言語を使用する。スロヴェニア人は、セルビア人やクロアチア人とはやや異なった言葉を使すが、彼らは相互に意思疎通が可能である。しかし、各地域に割拠する南スラヴ人は7世紀に定住を完了して以来、近代に至るまで独自の歴史を歩んできた。何よりも彼らは共通の国家を形成したことがなかった。19世紀の初めには南スラヴ人は大別するとオーストリア＝ハンガリー領とオスマン・トルコ領に別れて居住し、相互に没交渉の状態であった。

南スラヴ人は、宗教、文字、文化的伝統、社会構造などの点でも大きな相違があった。19世紀という諸民族の覚醒の時代には、これらの相違は個別の民族意識を成長させるモメントとなった。しかしながら、南スラヴ人としての類縁性は、同じ時期に南スラヴ統一主義（ユーゴスラヴィズム）の思想を発展させた。ユーゴスラヴィアという言葉を使い、南スラヴ人統一国家構想を最初に提唱したのは、19世紀後半のクロアチア人の政治指導者であったヨシプ・シュトロスマイエル司教（1815－1905）である。彼は、すべての南スラヴ人を独立で自由な国家的・民族的な共同体に統合することを最終目標とした。この共同体（ユーゴスラヴィア）は、各民族を完全に対等・同権の関係におき、各民族の主要な支配地域に国家としての自立性と自治権を保証する連邦制的な統一国家であった。

第一次世界大戦末期、オーストリア＝ハンガリー帝国の敗戦が決定的に

なるにつれて、同地域の南スラヴ人の中で統一国家形成の気運が高まった。国家統合の第一段階は、1918年10月29日に実行されたオーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域の分離独立であり、彼らはクロアチアの首都ザグレブで「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の樹立を宣言した。これは最初のユーゴスラヴィア国家であった。この国家は、1918年12月1日にセルビア王国と合併し、全南スラヴ人の居住地域をほぼ包摂するユーゴスラヴィア国家が誕生した。正式な名称は、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」である。

問題はここからであった。企業にせよ、自治体にせよ、合併の実現に至るまでは双方共に都合よく期待を膨らませて、将来をバラ色に考えやすい。その結果、ユーフォリアからさめたとき、理想と現実のギャップを見せつけられ、こんなはずではなかったと大きくとまどうということはよくある話である。これは国家の合併の場合も同様である。オーストリア＝ハンガリーとオスマン・トルコという文化や政治的伝統が大きく異なる二つの文明世界に属していた諸地域が合体したユーゴスラヴィアはまさにその典型的ケースであった。

旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人は、セルビア王国との国家統合の際、憲法制定議会が最終的に国家制度の決定をおこなうまでの過渡期の期間では、各地方の自治権が従来どおりに維持されることを求め、それはセルビア側代表も了解したと考えていた。したがって、統一国家は少なくとも当分の間、単一国家ではあるが連邦制に近い国家形態をとると彼らは思い込んでいた。しかし、セルビア側代表はそのような了解をした覚えはなかった。これはそのとおりであり、実際に何の協定文書も存在しなかった。そのため、セルビア側は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域をセルビア王国の中に統合しようとする彼らの国家構想が暗黙の承認を得たと考えていた。1918年12月1日の国家統合のセレモニーは同床異夢のもとに進められたのである。振り返れば、問題の発端は、セルビアの首都ベオグラードに派遣された旧オーストリア＝ハンガリー領の代

表団が、セルビアとの国家統合の枠組みについて事前に明確に定められた指針<sup>1</sup>を携えていながらも、これに沿ってセルビア側と交渉をおこなわなかったことにあった。もちろん、このことの背景には、国家統合の実現が双方にとって急務の課題であったという事情があるが、彼らの行動は禍根を残す不作為となった。その結果、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」はセルビア王国と無条件に等しい形で国家統合をおこなうことになり、当時の両者の力関係によって、その後の統一国家の建設はセルビア側が事実上の主導権を握る形で実行されることになった。セルビア人もクロアチア人もこのことに触れたがらないが、私がみるところでは、国家統合の枠組みをセルビア側と明確に取り決めなかったことは、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人代表が犯した歴史的なボーンヘッドであった。ユーゴスラヴィアの国家制度をめぐるセルビア人とクロアチア人との長年にわたる争いは、まさにここから始まることになったからである。

新しく誕生した統一国家が旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域を統合していく際に、イデオログの役割を果たしたのが、急進党と共に政権を担った民主党の指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチである。クロアチア出身のセルビア人であったプリビーチェヴィッチは、かつては旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の有力な政党指導者であり、独特のユーゴスラヴィア主義を信条とすることで名を馳せていた。というのは、ユーゴスラヴィア思想の創始者であるシュトロスマイエルは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人が祖先を同じくする兄弟民族であるという見地に立っていたが、南スラヴ各民族の歴史的・文化的な独自性を認め、すでに述べたように、諸民族の同権と連邦主義的な国家制度によるユーゴスラヴィア国家を構想した。ところが、プリビーチェヴィッチは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人が歴史的に引きずってきた相違を抹消し、南スラヴ人をあらゆる意味で単一の民族（ユーゴスラヴィア人）に統合することを理想とした。そのため、個別の民族意識を温存・助長するような地方の分離主義的な動きを遮断するために、厳格な中央集権

主義の原則で単一国家の形成をおこなうことを強く主張したのである。

単一民族国家の形成をめざすプリビーチェヴィッチのユーゴスラヴィア主義は超民族主義の主張であり、個別の民族主義である大セルビア主義とは似て非なるものではあったが、その中央集権主義の国家構想は旧オーストリア＝ハンガリー領の統合をめざすセルビア王国の指導者にとって、好都合なものであった。内相に就任したプリビーチェヴィッチの主導の下に、ベオグラード政府は統一国家の中央集権化に着手した。彼らは、旧オーストリア＝ハンガリー領各地域の自治権を否定し、地方政府を中央政府の出先機関のような存在に変えた。旧来どおりの自治権が維持されることを期待した旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人は、まもなくそれが幻想であったことを悟った。

旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人のうち、中央集権主義にもっとも大きな不満を抱いたのはクロアチア人であった。クロアチアは、旧オーストリア＝ハンガリー領内のスラヴ人地域の中で国家に準ずる地位を認められていた唯一の地域であったからである。正式の名称は「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア三位一体王国」と呼ばれ、国王はオーストリア皇帝が兼任していた。1867年にハプスブルク帝国がオーストリア＝ハンガリー二重帝国に再編された際、クロアチアおよびスラヴォニアはハンガリーの支配下におかれる地域になったが、クロアチア議会はハンガリー政府と協定を結び、自治王国としての地位と内政上の自治権を認めさせてきた。クロアチア人はこの地位と自治権をクロアチアの国法上の権利（国権）と呼んできた。しかし、統一国家の形成後にベオグラード政府がとった中央集権化と強権的な反対勢力の弾圧政策は、クロアチア人が誇りにする「国権」を完膚なまでに踏みにじるものとなった。

しかし、ユーゴスラヴィアの国家制度はまだ暫定的なものにとどまっていた。それは、国家の基本法である憲法が制定されていなかったからである。憲法を制定するには、総選挙をおこない憲法制定議会を召集する必要があった。憲法制定議会の議員は普通選挙によって選出されることになっ

ていた。この点は極めて重要である。なぜなら、1918年12月1日にユーゴスラヴィア諸地域の国家統合を決めた政治家はみな制限選挙のもとで選ばれた政党指導者であったからである。したがって、ユーゴスラヴィアの国家秩序はまだ民意による認証を受けていなかった。

普通選挙は、ユーゴスラヴィアの政界において、中央集権主義の急先鋒であった民主党の勢力を後退させ、新しい有力政党を出現させた。とりわけ、共産党の躍進は大きな驚きであり、政府にとって脅威となった。クロアチアではステパン・ラディッチ率いるクロアチア大衆農民党が民衆の支持を集めて躍進し、主要な民族政党となった。ベオグラード政府は、憲法制定議会において、君主制と中央集権制を基礎づける憲法の制定に成功したが、反対勢力を意識するあまり、国王に議会を超越するような絶対的な権限を付与した。これに対して、ラディッチは他のクロアチア人小政党を糾合してクロアチア・ブロックを形成し、クロアチアには統一国家の正当性を認めない、反中央集権主義の勢力が割拠することになった。他方、憲法制定後のベオグラードでは、急進党が勢力を拡大し、民主党との勢力争いが表面化していた。両党は連立政権を組んでいたが、相互のライバル関係のゆえに、お互いにこれまでの連立の相手を見捨てて、ラディッチに対して手を結ぶ意思があることを示した。その際、交渉のテーマとして浮上したのが中央集権的な国家制度の変更であり、これを規定する憲法の修正であった。いずれにせよ、総選挙と憲法の制定を経て、大戦間期のユーゴスラヴィアをつねに不安定にしてきた重大な国内問題の所在が明確になり、この問題の解決をめぐる駆け引きをおこなう主要な主体が出そろった。

南スラヴ人のナショナリズム研究で名高いイヴォ・バナツが指摘するように<sup>2</sup>、1918年12月の国家統合に始まり1921年6月の憲法制定によって中央集権的な国家体制が固まるこの期間は、ユーゴスラヴィアの民族問題の原点が形成された時期に当たる。とりわけ、中心的な問題であるセルビアとクロアチアの対立の原点が形成されたことは重要である。しかし、その後この問題がどのような展開を見せたのかについては通史書などでは簡

単な記述ですまされている。そのため、セルビア人とクロアチア人は当初から和解しがたい対立関係にあったかのようなイメージが流布しているが、これは誤解である。むしろ、これから述べるように、ユーゴスラヴィアの民族間関係からみて不自然な国家が形成され、政治的不安定が続いたがゆえに、問題の解決をめざして、セルビア人とクロアチア人の間で対話を模索する動きが始まることになるのである。

以下では、憲法制定の過程をもう少し詳しく説明し、そのうえで主として1922年後半のセルビア人とクロアチア人との接触の過程に焦点を当てて、その交渉がどのように進み、挫折したのかを明らかにしていくことにしたい。

## 2 ヴィードヴダン憲法の成立

1918年12月の国家統合（「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国宣言）から数ヶ月、ベオグラード政府は、中央集権的な国家制度の枠組みを瞬く間に築き上げた。だが、この国家制度はまだ暫定的なものにとどまっていた。それは、国家の基本法である憲法が制定されていなかったからである。国家統合時の合意によれば、講和条約の締結後6ヶ月以内に憲法制定議会を召集することになっていたが、憲法制定議会の議員を選出する選挙が実施されたのは、国家統合から2年が経過した1920年11月末のことであった。

総選挙の実施が遅れた理由の一つは、新国家の国境が未画定であり、いくつかの地域は外国の占領下にあつて選挙区や有権者の確定に支障があつたことである。新国家は、隣接するイタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニアと国境を画定する必要があつた。これらの国々との国境確定は1919年1月に始まったパリ講和会議の中で議論されたが、新生ユーゴスラヴィアにとって最大の難題は、1915年のロンドン条約を根拠に、イタリアがアドリア海沿岸ならびに島嶼部の

領有を頑強に主張して譲らなかつたことである<sup>3</sup>。「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」(以下、「南スラヴ人王国」と記す)は、オーストリアとのサン＝ジェルマン条約<sup>4</sup>(1919年9月10日)、ブルガリアとのヌイイ条約(1919年11月27日)、ハンガリーとのトリアノン条約(1920年6月4日)で大方の国境を画定したが、イタリアとの国境画定は最後まで合意に達せず、両国は個別に協議することになった<sup>5</sup>。その結果、1920年11月12日のラパロ条約によってようやく妥協的解決が決定した<sup>6</sup>。

しかし、総選挙が先延ばしにされた理由は国境画定問題だけではなく、もう一つの大きな理由は、旧セルビア王国の主要政党が政権抗争を再燃させ、互いに足を引っ張り合ったため、選挙の枠組みがなかなか決まらなかったことである。旧セルビア王国の政党は、第一次世界大戦前から、ニコラ・パシッチを党首とする与党の急進党と、急進党の路線に反発する野党勢力とが激しい政権抗争を繰り広げてきた。南スラヴ人統一国家の成立後、両陣営は呉越同舟で連立政権を組んでいたが、他方で彼らは来るべき選挙での勝利をめざして、新たな同盟者を求めた。リュバ・ダヴィドヴィッチを中心とする旧セルビア王国の野党勢力は、旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の有力な政治指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの結成した民主党に合流して、臨時国民議会の第一党を構成した。急進党は首相ポストこそ確保していたが、閣僚の過半数を民主党に握られ、政治の主導権を事実上、民主党に奪われていた。旧オーストリア＝ハンガリー領の統治政策をめぐる、強権政策の維持を主張する内相プリビーチェヴィッチと対立した首相のスタン・プロティッチは、クロアチア人政党やスロヴェニア人政党と連携することによって民主党に対抗しようとした。しかし、国家元首を代行する摂政アレクサンダルの支持を得たプリビーチェヴィッチらの勢力は強力であり、プロティッチは、閣内不一致を理由に1919年8月、首相を辞任した。これに代わって、民主党のダヴィドヴィッチを首班とする政権が誕生し、急進党は野党に転じた。しかし、この内閣は議会で急進党を始め諸政党の激しい抵抗に遭い、しばしば

立ち往生した。そのため、この内閣は勅令で議会を一時閉会したあげくに、さしたる仕事をすることなく辞職に追い込まれた<sup>7</sup>。このあと政権は急進党に移り、プロティッチが首相の座に復帰したが、野党に転じた民主党は議会の審議を妨害し、議会は機能不全の状態が続いた。

南スラヴ人王国の内政が多少とも安定し始めたのは、1920年5月、パリ講和会議に参加していたミレンコ・ヴェスニッチを摂政アレクサンダルが呼び戻し、首相に任命してからである。ヴェスニッチは、アレクサンダルの意向に沿って、急進党と民主党との連立政権を復活させた。ヴェスニッチは外交官として長らく国外に滞在し、国内の政権抗争に直接の関係のなかった人物であった。アレクサンダルは、彼を首相に据えることで、諸政党の指導者に挙国一致内閣の復活を求めたのである<sup>8</sup>。1920年9月2日、臨時国民議会は憲法制定議会の議員を選出するための選挙法を採択し、ここによりやく総選挙の実施と施行細目が決まった<sup>9</sup>。

1920年11月28日、南スラヴ人王国誕生後、最初の国政選挙が実施された。22の政党と政治集団が候補者名簿を提出したが、議席を獲得したのは16であった。政党別の得票数、得票率、議席数は次のとおりである。

表1 1920年11月28日の憲法制定議会選挙結果

政 党	得票数	得票率	議 席
民主党	319448	19.9	92
急進党	284575	17.7	91
共産党	198756	12.4	58
クロアチア大衆農民党	230590	14.3	50
農業者党	151603	9.4	39
スロヴェニア人民党	58971	3.7	14
クロアチア大衆党	52333	3.3	13
ユーゴスラヴィア・ムスリム組織 (JMO)	110895	6.9	24
社会民主党	46792	2.9	10
クロアチア農夫党	38400	2.4	7
ジェミイット党	30029	1.9	8
クロアチア同盟	25867	1.6	4
共和党	18136	1.1	3
クロアチア権利党	10880	0.7	2
人民社会党	6186	0.4	2
無所属 (アンテ・トルムビッチ)	6581	0.4	1
セルビア自由党	5061	0.3	1
投 票 総 数	1607265		419



選挙結果について、第一に指摘しなければならないのは、投票率の低さである。有権者数2480623に対して、投票者数は1607625、投票率は65%であった。有権者の3分の1は投票に行かなかった。初の普通選挙であったにもかかわらず、全般に有権者の政治不信は強かったとみることができ<sup>10</sup>。第二に連立政権を構成していた二大政党の民主党と急進党は、両方を併せても議会の過半数の議席を獲得できなかったことである。民主党は単独では最多の92議席を獲得したが、その獲得議席数は党幹部の期待を大幅に下回った<sup>11</sup>。民主党は、中央集権主義の維持、耕作者を重視する土地改革、共産主義運動に対する闘いなどを選挙戦で有権者にアピールし、ユーゴスラヴィア主義を標榜する政党として全国あらゆる地域に候補者を立てて、大量議席の獲得をめざした。しかし、その結果は臨時国民議会発足時の議席（総数296のうち115）をも下回る議席数となり、この2年間の彼らの政策に対する有権者の厳しい審判を示すものとなった。他方、急進党は91議席を獲得し、臨時国民議会の69議席よりも大幅に議席を増やしたが、地盤とする旧セルビア王国の選挙区では得票と議席が伸び悩んだ。ただし、急進党が民主党と拮抗する議席を獲得したことは、連立政権内部の力関係に変化をもたらした点で重要であった。

これとは対照的に大きな躍進を遂げたのは、共産党、農民政党、イスラム政党であった。共産党は旧セルビア王国およびモンテネグロだけで36議席を獲得し、とくにマケドニアでは15議席を獲得して急進党や民主党の議席を上回った。これはこの地域における反政府意識の強さを物語っていた。同様に農業者党も、セルビアおよびスロヴェニアで、農業政策や土地改革に対する零細農民層の期待を集めて議席を伸ばした。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、イスラム教徒が強い政治的凝集力を示して宗教政党であるユーゴスラヴィア・ムスリム組織を躍進させた。これは中央政府がイスラム教徒の利益や文化的独自性を軽視しがちであったことに対する抗議の表れであった。

クロアチア大衆農民党は統一国家の成立以前は小政党にすぎなかった

が、国家統合後にいち早く断固たる反政府運動を展開して、中央政府の強権支配に悲鳴を上げていたクロアチア人民衆、とくに農民の支持を集めて急速に勢力を伸ばしていた。ただそれだけにこの党は早くから中央政府の厳しい弾圧を受けた。党首のステェパン・ラディッチは政治犯として長らく投獄されていたし<sup>12</sup>、この選挙でも官憲の監視の下で際だった運動を展開することができなかった。クロアチア大衆農民党が候補者を立てたのはクロアチアとスラヴォニアの選挙区だけであり、ラディッチが国王の恩赦によって釈放されたのは投票の前日であった。したがって、この党がこれほどの得票と議席を得るとはベオグラード政府は予想していなかった。ところが、クロアチア大衆農民党は農村部で圧倒的な強さを発揮し、組織や資金力で勝る既成政党を押しよけて、一躍クロアチアを代表する政党になった<sup>13</sup>。

ベオグラード政府はクロアチア大衆農民党の動向に警戒感を強めた。この党は、クロアチアの南スラヴ人王国への統合を認めず、「国際的に承認された南スラヴ人国家の国境の中でクロアチアを中立の農民共和国として樹立する」という立場に立っていたからである。12月8日、クロアチア大衆農民党は党の総会を開いた。彼らは、今回の選挙はユーゴスラヴィアの国家形態を国民に問いかける住民投票であり、クロアチア大衆農民党の勝利は彼らの主張をクロアチア人の大多数が支持したことを意味しているという声明を発表した<sup>14</sup>。この総会では、ラディッチの提案により、クロアチア大衆農民党は、クロアチアを農民主体の主権共和国としてユーゴスラヴィアの中に樹立するという党の立場を鮮明にするため、党名を「クロアチア共和農民党」に変更した。クロアチア共和農民党は、採決の方式を変更しない限り、憲法制定議会に参加しないと表明して、当選した議員をベオグラードに派遣しなかった。彼らの求める国家形態の決定方式は、議会における多数決による採決ではなく、民族代表間の交渉と協定の締結であった。クロアチア共和農民党に同調して、クロアチア権利党も議会に議員を派遣しなかった。

1920年12月12日、憲法制定議会は召集された。憲法制定議会の最初の仕事は、議会の規程の制定であった。これからどのような規則や手続きにしたがって憲法を作成していくのかは重大な問題であったため、その審議は政治的色彩を帯びて冒頭から紛糾した。

第一の問題は、議会在規程を自らの手で定めるのではなく、政府が作成した規程を議会に押しつけようとしたことである。これは手続き上も不備があった。選挙法によれば、政府は臨時国民議会の委員会との合意の上で憲法制定議会の規程を定めることになっていたが、政府は臨時国民議会が解散したあとの12月8日に単独でこの規程を制定したからである。しかも、この規程によれば、当選した議員は国王に忠誠を誓った後に初めて議員資格が認証されることになっていた。国王に対して忠誠を誓うことは、国家の政体に関して、君主制を暗黙の前提として憲法草案の作成に参加することを意味した。しかし、これでは憲法制定議会は自由に議論をおこなって国家制度を決定する場ではなくなってしまうので、共産党を筆頭に、共和党、社会民主党など共和制国家を求める政党が強く反発し、規程を議会の手で作り直すことを求めた。これに対して政府の見方はこうであった。1918年12月1日に旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人の全権代表とセルビア側の全権代表を前にして摂政アレクサンダルがおこなった「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国宣言によって、この国は君主制国家として確立している。したがって、憲法制定議会は国家を一から作り直すような権限をもたないし、国王の地位を変更することはできない。憲法制定議会はこの王国の内部組織と機能を定めるだけである<sup>15</sup>。

第二に政府が作成した規程は、議会の定数の過半数の賛成によって憲法を採択することを定めていた。これは相対的多数の議席をもつセルビア人政党に有利に働くことが予想されたので、スロヴェニア人民党、クロアチア同盟、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのイスラム教徒を代表するユーゴスラヴィア・ムスリム組織は、三分の二の賛成が必要との立場を主張した。

さかのぼれば、1917年7月に旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の政治結社であるユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府が南スラヴ人統一国家の建国に合意した文書であるコルフ協定は、来るべき憲法制定議会在「質的多数決」によって国家の形態を決定することを求めている。これは、少なくともユーゴスラヴィア委員会の側では、単純多数決ではなく、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の三民族それぞれの過半数の合意による決定を意味すると理解されていた。オーストリア＝ハンガリーからのクロアチア国家の独立と南スラヴ人合同国家への参加を宣言した1918年10月29日のクロアチア議会の決議でもこの立場は受け継がれていた。ところが、ヴェスニッチ政府、およびこれを引き継いだパシッチ政府はコルフ協定やクロアチア人の見地を否定し、単純過半数による採決を主張した<sup>16</sup>。

野党の徹底した抗議にもかかわらず、政府は規程の撤回に応じる態度は示さなかった。政府がこの規定に固執した背景にはクロアチア共和農民党の存在があった。野党の求めに応じて国王に対する忠誠条項を削除すれば、クロアチア共和国の代表を名乗るクロアチア共和農民党の議員が王国を承認することなく議会に参加する道を開く恐れがあったからである。もしラディッチらが議会に来れば、議会内部の勢力関係が大きく変わり、また彼らはその公言する主張に沿って、憲法制定議会の決定方式の変更を求めてくることは必至であった。

政府を支える民主党と急進党の議席は議会の過半数に達していなかった。反対勢力が一致結束すれば規定は否決され、憲法制定議会の審議は空転する恐れがあった。この窮地を救ったのは農業者党であった。彼らは憲法の審議を急がなければならないという理由から、政府の規定案の賛成に回った<sup>17</sup>。結局、1921年1月25日、政府は内容面ではほぼ同一の規程を再提出した。彼らは、農業者党の賛成を得て議会の過半数を確保し、1921年1月28日、これを議会で採択することに成功した<sup>18</sup>。

1921年1月31日、この規程に沿って議会内部に憲法委員会が設置された<sup>19</sup>。憲法委員会はただちに憲法草案を議員に募った。委員会が設定した

提出期限はわずか14日間にすぎなかった。それでもこの短い期日のうちに9つの草案が寄せられた<sup>20</sup>。ところが、これらの草案の中から今後の審議のたたき台として2月16日に委員会が採択したのは、政府案のみであった。このあと4月5日まで委員会は政府案の内容に対する審議を続けた。委員会での議論の最大の争点は、国家制度であった。第一に政府案は国家の政体として君主制を前提とし、しかも議会に優先する大きな権限を国王に認めていた。しかし、これには共産党、共和党、社会民主党が強く反対し、共和制を求めた。次に意見が分かれたのは国家の内部構造であった。この年の始めに首相に就任したニコラ・パシッチが提出した政府案は、現行の国家制度を制度化するために、厳格な中央集権主義の立場を特徴としていた。しかもこの草案は、自然的・社会的・経済的条件にしたがって国土を35（後に33）の行政単位に細かく分割し、国家統合以前の歴史的な伝統をもつ地域の境界（スロヴェニア、クロアチア、ダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナなど）を徹底的に破壊することを予定していた。これに対して、クロアチア人とスロヴェニア人の代表政党（国民クラブとユーゴスラヴ・クラブ）は、旧オーストリア＝ハンガリー領時代に認められていた歴史的な地域の境界を維持し、これを領域とする地方政府およびその自治権を復活させようとした。ボスニア・ヘルツェゴヴィナのイスラム教徒を代表するユーゴスラヴィア・ムスリム組織も、中央集権主義には反対しないとしながらも、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの行政単位としての一体性の維持を求めた。委員会での審議の結果、政府は当初の案に大幅な加筆修正をおこなった<sup>21</sup>。だが、国王の地位と権限に関する規定と中央集権的な権力構造に関する規定には本質的な変更を認めなかった。

ところで、ここで注意を喚起すべき重要な事実がある。それは、1921年2月16日の憲法委員会における政府原案の採決の結果は、賛成23に対して反対19と「微妙な僅差」であった点である。憲法委員会は42人の委員で構成されていたが、賛成票を投じた委員は急進党の委員11名と民主党の委員11名、スロヴェニア農業者党の委員1名であり、共産党、農業者党、国民

クラブ、ユーゴスラヴィア・クラブ、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の各委員19名は反対票を投じた。ここでラディッチのクロアチア共和農民主党が議会に参加していたらその議席数に応じて6名の委員を得ていたので、採決の結果は逆転し、政府案は否決されていた可能性があった。その場合、政府案は廃案になり、反対勢力の提案を取り入れた憲法案が練り直されていた公算が大であった<sup>22</sup>。研究者の中にはクロアチア共和農民主党の議会ボイコットを有効な戦術ではなかったとみる者が多い。彼らが議会に参加していれば他の反対派と連携して政府案を根本的に修正できたとの指摘があるが（たとえば、Joseph Rothschild, *East Central Europe between the Two World Wars*, University of Washington Press, Seattle and London, 1974, p.216）が、憲法委員会での採決の結果を根拠とすれば、妥当な見方だといえる。

急進党と民主党の議席は憲法制定議会の過半数に30議席近く足りなかったため、政府案を議会を通すためには他の政党の協力がどうしても必要であった。彼らが目をつけたのは、政体や国家制度以外の面で交渉の余地があった農業者党（39議席）とユーゴスラヴィア・ムスリム組織（24議席）であった。しかし、パシッチ政府は、土地改革の方針をめぐって折り合いがつかず、農業者党とは交渉を打ち切った。それでも政府は農業者党からスロヴェニア人のグループ（スロヴェニア農業者党）を離反させ、政府の協力者にすることに成功した<sup>23</sup>。ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は当初はクロアチア人やスロヴェニア人の政党と共同行動をとる方針であったが、急進党の働きかけにより態度を変えた。彼らは、行政単位を設定する際にボスニア・ヘルツェゴヴィナの一体性を維持すること、宗教的・教育的自治の保証、イスラム教徒地主の土地を土地改革の対象から外すこと、旧封建領主の土地収用に対する補償金の支払い、サラエヴォ地方政府へのムスリム人の参加などを見返りの条件として獲得し、政府の憲法案を支持することにした<sup>24</sup>。このほか政府は、南セルビアのイスラム教徒の政治代表であるジェミット党と交渉し、行政単位の設定以外の点でユーゴスラ

ヴィア・ムスリム組織に与えたものと同様の保証を与えることにより、彼らの支持を取り付けようとした<sup>25</sup>。

しかし、政府は、中央集権主義に反対し、地方政府の自治権の復活を求めるクロアチア人政党やスロヴェニア人政党に対しては、いっさい譲歩を示さなかった。このため、5月12日、クロアチア同盟を中心に構成される国民クラブの議員は、政府はクロアチア人代表の意見を無視し、多数決で憲法を強制しようとしていると述べ、これに抗議の意思を示すために今後の審議に参加しないことを表明した<sup>26</sup>。次いで6月11日、懲罰動議をたびたび出され、議会での発言を封じられていた共産党の議員団が議会のボイコットを表明した<sup>27</sup>。6月15日にはスロヴェニア人民党を中心に構成されるユーゴスラヴィア・クラブの議員も、政府が協議に応じないことを理由に、憲法草案の審議と採決の欠席を表明した<sup>28</sup>。この結果、最初から議会に姿を見せなかったクロアチア共和農民党とクロアチア権利党の議員と合わせて、148人の議員が憲法の採決に参加しないことになった。

政府案が採択されるためには議会定数の過半数210の賛成票が必要であったが、投票直前の民主党と急進党の議席は176であった。政府は、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の協力を確保していたはずだが、直前になって土地改革や憲法の規定をめぐる政府との間に見解の相違が表面化し、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は政府案に対する支持を一時保留にする事態が発生した<sup>29</sup>。また民主党内に抵抗勢力があったため、政府とジェミット党との交渉は難航し、合意が成立していなかった。このため、憲法案の採決の日が間近に迫っても、過半数の支持票の確保は不透明なままであった。しかし、老獪なパシッチは、イスラム教徒地主に不利な土地政策を主張する農業党との交渉をおこなうことで、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の党幹部を最終的に譲歩させ、政府案に対する支持を改めて表明させた。ジェミット党とは採決の前日に協定を成立させた<sup>30</sup>。

1921年6月28日に実施された憲法制定議会での投票の結果は、賛成223、反対35、欠席158であり、政府案はかろうじて過半数の賛成を得て採択され

た。この日は、正教徒の暦では聖人ヴィトゥスを祝う日（ヴィードヴダン）であったので、南スラヴ人王国の最初の憲法はヴィードヴダン憲法と呼ばれた。

### 3 クロアチア・ブロック形成の波紋

ヴィードヴダン憲法の制定によって政府がこれまで築き上げてきた中央集権的な君主制国家の枠組みは法的に基礎づけられた。しかし、これによって南スラヴ人王国の政情は安定に向かったかといえば、そうではなかった。政府が憲法の採択を強行したことに反対勢力は議会外で大きな抗議の意思を示したからである。

一つは共産党員の反発である。1919年に隣国ハンガリーで共産党が革命政府を一時樹立した事件があり、南スラヴ人王国政府は当初から共産主義者の活動に警戒を強めていた。しかし、1919年4月に結成されたユーゴスラヴィア社会主義労働者党（翌年ユーゴスラヴィア共産党に改称）は労働組合の組織化を通じてしだいに支持基盤を拡大していた。しかも、共産党は憲法制定議会選挙で58議席を獲得して国政の表舞台に登場し、憲法制定議会では政府批判の急先鋒となったため、政府の警戒はいっそう強まった。1920年の年末にはボスニア地方の各地で鉱山労働者がストライキを起こし、一部では官憲の部隊と衝突する事態が発生したが、政府はこれを口実に12月30日、「オブズナーナ」と呼ばれる政令を公布し、労働組合運動への関与を始め共産主義者のあらゆる活動を禁止した。共産党の日常的な活動はこれによって大きな制限を受けたが、共産党の議員団は議会での活動を継続した。

だが、共産党の議会活動は与党側の妨害によって行き詰まったため、議会主義に疑問を抱いた一部の党員はテロによる報復を計画した。憲法が採択された翌日の1921年6月29日、一人の党員が摂政アレクサンダルと国会議長の乗った馬車に爆弾を投げつける事件を起こした。爆弾は通りにそれ



て爆発し、アレクサンダルらは無事であったが、翌月の7月21日、別のグループがオブズナーナの提案者である内相のミロラド・ドラシュコヴィッチを保養先で射殺した。いずれの事件も犯人はすぐに逮捕され、事件への関与を疑われた共産党の幹部も検察に訴追された<sup>31</sup>。8月3日、これらの事件を口実に政府はオブズナーナよりも強力な治安維持の法律である「国家保安法」<sup>32</sup>を議会で成立させ、共産党の存在そのものを非合法とした。このあと政府の主導により議会は共産党議員の議員資格を無効にする決定をおこない、すべての共産党議員を議会から追放した。

もう一つはクロアチアの野党勢力の結束である。クロアチアに根拠を置き、憲法制定議会選挙で議席を得た政党は、クロアチア同盟、クロアチア共和農民党、クロアチア権利党の三党であった。このうち、クロアチア共和農民党とクロアチア権利党は憲法制定議会をボイコットしたが、クロアチア同盟はボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人政党であるクロアチア農夫党と合同会派（国民クラブ）を結成して、憲法制定議会の審議に参加した。クロアチア同盟は、第一次世界大戦以前から活動していたクロアチアの有力政党スタルチェヴィッチ権利党に対して進歩民主党などのクロアチア人政党が1919年7月に合流して結成した政党である。彼らは、1919年から1920年に開かれた臨時国民議会では当初40議席をもち、クロアチア人を代表する政党として、南スラヴ人王国政府にたびたび閣僚を出していた。もともと彼らは、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチらのグループ（「クロアチア人・セルビア人連合」）と共に旧オーストリア＝ハンガリー領から独立した南スラヴ人国家とセルビア王国との国家統合を積極的に推進したグループであった。1918年12月1日の国家統合のセレモニーでは、その代表（スタルチェヴィッチ権利党党首のアンテ・パヴェリッチ）は旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人を代表してセルビア国王に国家統合を求める上奏文を読み上げた。憲法制定議会では、彼らは君主制を容認する立場に立ち、共和制を求めるクロアチア共和農民党およびクロアチア権利党とは一線を画していた。その代わりに、彼らは連邦制に近い

国家制度を主張し、クロアチア地方政府とその自治権の復活を要求した。しかし、政府はまったく彼らとの交渉に応じようとはしなかったため、これに憤慨したクロアチア同盟の議員は議会をボイコットし、ベオグラードを引き上げた。ザグレブに戻った彼らは戦術を転換し、ラディッチらとの共闘を始めたのである。

1921年5月21日、クロアチア共和農民党、クロアチア権利党、クロアチア同盟の三党は、「クロアチア人へのメッセージ」という名の文書を発表した。三党から選出された国会議員のすべてがこの文書に署名したが、これが後に「クロアチア・ブロック」と呼ばれた三党の統一行動の始まりであった。「メッセージ」は旧オーストリア＝ハンガリー領からのクロアチアの独立を宣言した1918年10月28日のクロアチア議会の決議を遵守し、クロアチア国家の独自性とクロアチアの文化、経済、社会的遺産を擁護することを求めた。「メッセージ」はまた、クロアチア人の意思に反する憲法を押しつけようとしているとベオグラード政府を非難し、クロアチアの代表が参加していない議会には憲法制定の権限を認めることができないと主張した。そのうえで、ベオグラード政府の中央集権主義に対抗するために、すべてのクロアチアの勢力を結集することが必要性だと「メッセージ」は説いた<sup>33</sup>。クロアチアの野党勢力はその後も結びつきを強め、1921年8月初めにはクロアチア・ブロックを共闘組織として正式に発足させた。その幹部会議には三党から二人ずつメンバーを出し、執行部には各党を代表してステパン・ラディッチ（クロアチア共和農民党）、マテ・ドリンコヴィッチ（クロアチア同盟）、ミルコ・コシュティッチ（クロアチア権利党）が選ばれた。しかし、当然のごとく主導権を握ったのは最大勢力を代表するラディッチである。

クロアチア・ブロックは、クロアチアの国権と独自性の承認を求める点では一致していたが、これをどのような戦術で実現するかについては三党間には見解の相違があった。クロアチアの国家主権をもっともラジカルに主張するクロアチア権利党は、クロアチア問題は内政上の問題ではなく、

国際問題であり、国家間代表による交渉によって解決されなければならないという立場に立っていた。これに対して、もともと不本意に議会をボイコットしたクロアチア同盟は、クロアチア問題を内政上の問題としてとらえ、ベオグラードの政権と協定を締結することによってこれを解決し、早期に議会に復帰したいと考えていた。最大勢力のクロアチア共和農民党の戦術的振幅があり、しばしばクロアチア問題を国際社会に訴えて、ベオグラード政府に影響力の行使を求めようとした。その一方で、彼らはクロアチアの民族的要求をユーゴスラヴィア国家の枠組み内で解決することを求め、議会のボイコットを続けながらも、ベオグラード政府との交渉の機会をうかがっていた。

クロアチアの野党勢力の結束は、ベオグラードの与党勢力、つまり急進黨と民主党の関係に波紋を投げかけた。もともと急進黨と民主党は共に主としてセルビア人の居住地域を地盤とし、選挙に際してはセルビア人有権者の票を奪い合うライバル政党であり、前に述べたように臨時国民議会では激しい政権抗争が発生した。彼らは、野党勢力との対抗上、憲法制定議会では憲法を採択するために表立った対立を控え、協力関係を維持してきた。しかし、憲法は首尾よく制定されたため、しだいに元の関係に戻ろうとする力が働き始めた。国家保護法の制定と議員資格の剥奪により、共通の政敵であった共産党に壊滅的な打撃を与えることができたこともこの力の働きを促すことになった。

最初に表立った行動を起こしたのは、党首のニコラ・パシッチと対立して急進黨幹部の中で孤立していたスタン・プロティッチである。プロティッチは南スラヴ人王国政府の初代と三代の首相であった。初代首相在任時、プロティッチは旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の統治政策をめぐって中央集権制の緩和を主張し、厳格な中央集権主義を維持しようとする民主党の指導者プリビーチェヴィッチと衝突した。この経歴が示すように彼は、ユーゴスラヴィアの複雑な民族問題を考慮して、地方政府と自治権の復活を求めるクロアチア人の要求に早くから一定の理解を示してい

たことで知られる人物であった。プロティッチは、単一の国家制度を維持しながらも、歴史的な地域区分を尊重した行政区分をおこない、地方政府と議会には一定範囲の権限を移譲すべきだという立場に立ち、憲法の審議の過程では独自の憲法案を憲法委員会に提出していた。したがって、現行の憲法を支持していなかったプロティッチは、「憲法修正」をテーマにラディッチを中心とするクロアチア人反対勢力と協定を結び、彼らを急進党の陣営に取り込むことができないかと考えたのである。この方針は、中央集権主義の頑強な擁護者であるプリビーチュヴィッチらの民主党を政権から排除することを当然の帰結としていた。急進党党首のパシッチは、自ら提案したヴィードヴダン憲法をただちに修正する気はなかったが、クロアチア・ブロックとの連携の可能性をちらつかせることはライバル政党の民主党に揺さぶりをかけ、急進党の政治的立場を強化するという判断から、他の幹部と共にプロティッチの行動を容認する方針をとった<sup>34</sup>。

ラディッチとプロティッチの会談は、1921年8月10日にクロアチアの保養地リムスカ・トプリツァでおこなわれた。1918年12月1日の統一国家の成立後、ラディッチがセルビア王国の政治指導者と接触するのはこれが最初であった<sup>35</sup>。プロティッチはまず、急進党と党首のパシッチはけっして反クロアチア人の方針をとっていないと切り出した。これはこれまで政府がとってきた対クロアチア政策の責任は民主党にあることを暗に示唆していた。プロティッチは話し合いを続けて合意をめざすことが必要だと述べ、急進党はラディッチらと交渉の意思があることを示した。話題は国家制度の再編に転じ、ラディッチは、南スラヴ人は民族的・地理的・社会的見地からは一つの国民（ナロード）であるが、文化的・歴史の見地からは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、ブルガリア人から構成されるという持論を披露し、このような地域では中央集権主義は適さないと述べた。プロティッチはブルガリア人が南スラヴ人に含まれることには賛成しなかったが、厳格な中央集権主義は南スラヴ人の国家にふさわしくないことには同意した<sup>36</sup>。二人はこのあと場所を変えて二度会談した。ラ

ディッチは、これらの会談を通して、クロアチア人は政治的な独自性の獲得のために最後まで闘争を続けると主張したが、同時にクロアチア人は公正な協定をセルビア人と結ぶ用意はあると述べることも忘れなかった。

プロティッチとラディッチの会談は具体的な成果に結びつかなかったが、民主党の内部に大きな影響を与えた。民主党は、リュバ・ダヴィドヴィッチを中心とする旧セルビア王国の野党勢力と、旧オーストリア＝ハンガリー領のセルビア人政治指導者プリビーチェヴィッチが率いるグループとが1919年に合体して結成された政党であった。プリビーチェヴィッチはきわめて原則的な統合的ユーゴスラヴィア主義者であり、その理念を中央集権主義的な国家制度によって実現する政治基盤をつくるために民主党を結成したが、ダヴィドヴィッチ・グループはライバル政党の急進党に対抗し、政権を獲得することを最大の動機として民主党に合流した。彼らにとっては、中央集権制は絶対的な手段ではなく、急進党に対抗して政治的影響力を強化するためには、中央集権制の緩和や憲法の修正をおこなって、クロアチアの野党勢力と連携することも選択肢の一つであった。したがって、急進党のプロティッチが民主党を出し抜いてラディッチと接触したことはダヴィドヴィッチ派を刺激し、対抗策に向かわせた。1919年9月、今度はダヴィドヴィッチが側近のミラン・グロルをザグレブに派遣した。グロルはただちにラディッチと会談し、クロアチア・ブロックの議会参加の可能性を打診した。ダヴィドヴィッチは何らかの方法で急進党のもくろみをくじき、来るべき政局の主導権を握ろうと考えたのである。もともと、ラディッチとの話し合いは進展しなかったが、ダヴィドヴィッチはプリビーチェヴィッチの了承もなくザグレブに使者を派遣したため、あとでプリビーチェヴィッチの猛烈な反発を招くことになった<sup>37</sup>。

プリビーチェヴィッチにとって、成立したばかりの憲法を修正することは民主党の路線転換を意味し、論外の政策であった。民主党は1921年10月30日と31日、最初の党大会を開いたが、そこでの主要な演説者はプリビーチェヴィッチであった。民主党は国家と国民の統一性を確保するために結

成された政党であり、憲法の修正は国家の遠心力を強め、結果的に単一国家を三つの国家（セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の国家）に分解してしまう。このように述べて、プリビーチェヴィッチは憲法修正に断固として反対を表明した。党大会はプリビーチェヴィッチの見方に賛同し、「民主党はヴィードヴダン憲法の徹底的な実施を擁護し、所定の法律の制定によってこれが日常生活に完全に根付くまでは憲法の修正ないし変更には同意しない」という決議を採択した<sup>38</sup>。党大会の直後の11月初め、内相の地位にあったプリビーチェヴィッチは、ヴィードヴダン憲法に沿って国土を33の行政単位に分割する法案を発表した。プリビーチェヴィッチはこの法律の制定を急ごうとしたが、そこにはこれによってヴィードヴダン憲法体制を確定し、急進党がクロアチア・ブロックと交渉をおこなう余地をなくしてしまおうという意図があった<sup>39</sup>。

プリビーチェヴィッチがヴィードヴダン憲法を頑強に擁護した背景には、南スラヴ人の単一民族的な一体性の実現という理念（統合的ユーゴスラヴィア主義）上の理由だけでなく、彼のグループ内の主要なメンバーがクロアチア出身のセルビア人で構成されていたという事情があった。クロアチアのセルビア人は、自分たちにとって唯一好都合な国家は、準国家的な地域権力の存在を認めない中央集権的な単一民族国家だと考えていた。というのは、ユーゴスラヴィア全体ではセルビア人は多数派の支配民族であるが、ラディッチらクロアチア人反対勢力が要求する連邦制的な国家制度が実現すると、クロアチアのセルビア人はこの地域における少数民族として孤立してしまう。その場合には、多数派のクロアチア人がセルビア人の既得権を引き続き認めるかは不透明となる。それゆえ、彼らは、南スラヴ人を単一民族とみなしてクロアチア人問題の存在自体を否定し、中央集権的な単一国家の維持を執拗に支持したのである。

これに対して、ダヴィドヴィッチ派のメンバーは、旧セルビア王国の野党勢力（独立急進党、進歩党、国民党）出身者であった。彼らは、選挙に際しては、旧オーストリア＝ハンガリー領を地盤とするプリビーチェ

ヴィッチ派のメンバーとは異なって、より多くの選挙区で急進党議員と地盤が競合していた。したがって、彼らは、民主党の党綱領の実現よりも、ライバル政党である急進党の打倒を第一に考えなければ自らの政治的地位を維持できない状況に置かれていた。もともと彼らは政治的影響力の拡大のために、セルビアの外部の政党との連携を必要とした。彼らが旧オーストリア＝ハンガリー領のプリビーチェヴィッチ・グループを中核とする民主党に合流したのはそうした理由からであった。しかし、プリビーチェヴィッチ派が中央集権主義の維持のために急進党への接近を深めるにつれて、ダヴィドヴィッチ派は別の政治勢力との連携が必要となってきた。民主党の路線をめぐる派閥対立は、このような両者の支持基盤の相違に根ざしていた<sup>40</sup>。

ライバル政党の急進党は民主党の弱点を見抜いており、党内基盤の弱体化をねらって民主党にしばしば揺さぶりを仕掛けた。ストヤン・プロティッチは、1921年9月、プリビーチェヴィッチの不祥事を機関誌に暴露して道義的責任を問うた。それは、内相ドラシュコヴィッチの暗殺を幫助したルドルフ・ヘルツィゴニャという男に対して、民主党指導者のプリビーチェヴィッチが内相を務めていた1919年に4万クロナの金銭を与えていたというものであった<sup>41</sup>。さらに急進党は官憲の統率権を始め重要な権限をもつ内相のポストを民主党から取り戻そうとして画策した。12月3日、いったん辞表を提出して内閣を総辞職させたパシッチは、再び首班指名を受けて民主党と組閣交渉に入った。急進党は内相のポストの獲得をねらったが、民主党はその見返りとして急進党が受け入れがたい要求を突きつけて<sup>42</sup>、内相のポストを譲ることを拒否した。ただし、民主党は急進党の意向を考慮して、議員総会を開き、急進党側の不満が強かったプリビーチェヴィッチを内相からはずす決定を多数決でおこなった。投票の結果はダヴィドヴィッチ派の勝利であったが、党内にはしこりが残った。急進党は内相のポストを獲得できなかったが、民主党の内部対立を助長することには成功した。もともと、プリビーチェヴィッチは教育相の地位に就き、

依然大きな影響力を保持した<sup>43</sup>。

#### 4 政権をめぐる駆け引きの交錯

憲法の採択によって憲法制定議会はその役目を終えた。本来ならば新憲法が規定する議会を開くために総選挙が実施されるべきところであるが、1921年7月、憲法制定議会は勅令によって通常の国民議会に衣替えをした。ただし、この議会の権限は前年に成立した選挙法によって大きく制限されており、憲法の規定に関連する法律と緊急を要する予算関連の法律しか議決できないことになっていた。しかも、その開催期間は最長二年と定められていた。この議会はクロアチア・ブロックの議員63名が参加せず、議員資格を剥奪された共産党議員58名の議席には補欠選挙もおこなわれていなかったため、定員の30%近い議席が欠員という異常な状態が続いていた。したがって、国政を正常におこなうために、総選挙を実施して新しく議員を選出し、憲法が定める議会を早期に開催することが必要であった。だが、そのため、急進党と民主党は、選挙をにらんだ駆け引きをしないで活発化させることになった。

旧セルビア王国の政党、すなわち、急進党と民主党ダヴィドヴィッチ派はそれぞれ、来るべき選挙を有利に闘うために、クロアチアの野党勢力を自陣営の味方につけることをねらった。急進党は、1921年12月に開いた地方代表者会議でクロアチア問題について特別の決議を採択し、クロアチア人の要求に理解を示して、地方分権を拡大する用意があることを明らかにした。その上で、この決議は、国家と国民の一体化を前提にクロアチア人に対して話し合いのテーブルに就くことを暗に求めた<sup>44</sup>。民主党内では、内相のヴォヤ・マリコヴィッチがプリビーチェヴィッチと党の総務会で衝突した。彼は、プリビーチェヴィッチの存在を党勢拡大の最大の障害だと述べ、急進党のプロティッチが暴露したヘルツィゴニャ事件を蒸し返してプリビーチェヴィッチに閣僚辞任を求めた<sup>45</sup>。



これに対して、クロアチアのセルビア人を主要な支持基盤とするプリビーチェヴィッチ派はこれまでどおり官憲の力を利用して、クロアチアの野党勢力の運動を強権的に抑え込むことに注力した。プリビーチェヴィッチの意向を受けて、クロアチアの行政当局は野党の機関誌の発行や政治集会の実施を禁止し、異議を唱える者を容赦なく逮捕した。「ラディッチ万歳」と叫んだだけで20日間の禁固刑を受けるほどであった。プリビーチェヴィッチ派の機関誌は、クロアチアではいまにも革命が起きそうな雰囲気があることを連日のように伝えて世論の危機感をあおった<sup>46</sup>。

クロアチアのラディッチは相対的に優位な立場にあったが、足下をすくわれるような事件が起こった。1922年1月、クロアチア・ブロックは、イギリスのイニシアチブによりイタリアのジェノヴァで開かれることになっていた国際会議に向けて呼びかけを計画していたが、その「覚え書き」が準備段階で漏れて、2月8日、ベオグラードの日報『ポリチカ』に掲載されたのである。この「覚え書き」はクロアチアの国権に立って現行の国家の成立と統治構造の不当性を説き、クロアチア国家の主権回復と南スラヴ人国家の国家制度の再編に支持を求めるものであった<sup>47</sup>。しかし、それはクロアチアの歴史と社会を西欧文明に属するものとして自慢し、これに対して随所にセルビアの政治的伝統について西欧的理念をもたない野蛮なものとしてこきおろす記述を含み、また国際社会にベオグラード政府に対する圧力の行使を暗に求めていたので、セルビア人を大いに怒らせた。それだけでなく、この「覚え書き」は、プリビーチェヴィッチ派に反クロアチア・ブロックのキャンペーンを強化する絶好の口実を与えた。

パシッチ政府は、ヴィードヴダン憲法を実施に移すために当時の内相プリビーチェヴィッチが公表した行政区法を店ざらしにしていた。その理由はクロアチア・ブロックとの交渉カードを温存しておきたいという思惑があったからであるが、ここにいたってこの法律を成立させる方針を固めた。これに抗議してユーゴスラヴィア・ムスリム組織の二名の閣僚が辞任したが、パシッチは同党から賛同者を一本釣りして入閣させ閣議を成立させ

た上で、1922年4月26日、これに署名した<sup>48</sup>。この法律に従えば、これまでの歴史的な地域区分は完全に否定されて、国土は33の行政区（州）に分割され、中央政府の厳しい統制下に置かれることになる。クロアチア・ブロックは、5月15日、このような国土の分割に強く抗議した。クロアチアでは政府と民衆の間には小競り合いが幾度か発生した。ところが、奇妙なことに、行政区法は成立したものの、この法律に沿って国土の行政的分割がただちに実行されたわけではなかった。その即時実施を求めたのは政府・与党内では民主党プリビーチェヴィッチ派だけであった。急進党も民主党ダヴィドヴィッチ派もこの法律の実施を先延ばしにすることで、クロアチア・ブロックとの交渉の余地を残そうと考えていたのである<sup>49</sup>。

ところで、民主党のダヴィドヴィッチは急進党やプリビーチェヴィッチ派との対抗上、クロアチア・ブロック以外の勢力との連携をも考えていた。クロアチア・ブロックの中核であるクロアチア共和農民党は農村部のクロアチア人の絶大な支持を得ていたが、都市部のクロアチア人の中には彼らの主張に与しないグループもあった。その一つは、ヨシプ・スモドラカとミラン・チュルチンを中心とし、『新しいヨーロッパ』という雑誌に寄稿していたダルマチア地方の知識人グループであった。もう一つは、『自由のトリビューン（擁護者）』という雑誌に寄稿していたザグレブの知識人グループである。後者は第一次世界大戦中に南スラヴ人統一国家の形成を求めて活動したユーゴスラヴィア委員会のメンバーが中心になっていたが、アンテ・パヴェリッチ（スタルチェヴィッチ権利党の元党首で国民評議会副議長）のような旧世代の政治指導者もこれに加わっていた。彼らは、現在の政権には批判的であるが、クロアチア・ブロックの綱領や闘争戦術にも反対の立場をとり、国家制度の点では連邦制を求めず単一国家制度を支持するが、広範な地方分権の確立を求める立場をとっていた。このような傾向から彼らは「中道路線グループ」と呼ばれた。彼らは、「ユーゴスラヴィア独立社会政治クラブ」という名のもとに1922年初めから政治的活動を活発にし、同じような考え方をもちた知識人を組織化しようと計画していた。

彼らの主張は民主党のダヴィドヴィッチ派の志向と共鳴するものがあつた。それゆえ、ダヴィドヴィッチ派はこれらのグループとの連携を確立しようとし、1922年4月にはダヴィドヴィッチ自らがザグレブを訪問して、バヴェリッチら『自由のトリビューン』派の知識人と会談をおこなつた<sup>50</sup>。

クロアチアの知識人グループと同じような政治的志向をもつた知識人グループはボスニアにも存在した。それは『ナロード』という雑誌を主催していた知識人であり、その中心はニコラ・ストヤノヴィッチやドゥシヤン・ワシリエヴィッチであり、かつてユーゴスラヴィア委員会の運動に参加していたセルビア人であつた。彼らは、セルビアの著名な雑誌『セルビア文学雑誌』編集部と共催で、1922年6月28日と29日、ボスニアの首都サラエヴォ近郊のイリジャで知識人の合同会議を開いた。この会議にはクロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビアの各地から23名のセルビア人とクロアチア人が参加した。会議の参加者は、民族的な構成ではセルビア人の方が多かつたが、政党所属では民主党の黨員または元黨員が多数を占めた。いずれもプリビーチェヴィッチの中央集権主義政策に批判的な人びとである<sup>51</sup>。

会議の参加者は、「セルビア人とクロアチア人の関係改善」をテーマに自由に意見を述べ、国家の現状について次のような決議を採択した。1. 現在の国民の不満と国家の困難の主要な原因は、行政機構の欠陥に加えて、政府とクロアチアの主要な野党勢力がとっている両極端な対決姿勢にある。2. 政党のアジテーションによって民族間の不信と敵対感情が助長されているとしても、国民の連帯と国家の統一の求める生き生きした感情は国民の間に存在する。3. 政府とクロアチアの野党勢力はお互いに協定の成立と国家の安定を困難にしている。4. 国土の行政的分割を強行することは協定の成立を困難にする。5. 地方分権を拡大する方向で憲法を修正することは、民族間の不信を取り除き、行政機構を改善し、平等の感覚を広め、それによって南スラヴ人としての共通意識および国家の統一性に対する意識を発展させることになる<sup>52</sup>。最後に会議の参加者は、セルビア人

とクロアチア人の協定締結に向けて和解的雰囲気が高めるため、9月10日にクロアチアの首都ザグレブでもっと多くの知識人を集めた大会を開くことを決めた。

このあと9月のザグレブ大会に向けてただちに実行委員会が立ち上げられた。その長にはヨシプ・スモドラカが就任したが、主導権を握ったのはプリビーチェヴィッチの政策に異論と不満をもつ民主党のダヴィドヴィッチ派のメンバーである。彼らの一部は、この運動を契機にユーゴスラヴィア的な志向をもったセルビア人とクロアチア人の市民政を結成することをもくろんでいた。その構想によれば、この政党は、クロアチア・ブロックと政府の政治姿勢に反対する同志によって結成され、地方分権の拡大の方向で憲法を修正することにより、民族間の対立と緊張を緩和するとされた<sup>53</sup>。会議の準備段階では、このほかにも様々な構想が浮かび上がったが、いずれにせよダヴィドヴィッチ派のメンバーの共通の目標は、この会議をきっかけに政府とクロアチア・ブロックの双方の政策に反対する勢力との合従連衡を実現し、急進党と民主党の連立に代わる新しい政治勢力の組み合わせを形成することにあった。その際、当面の働きかけの対象は「中道路線」をとるクロアチア人の知識人グループであったが、その一方で実行委員会の一部は、将来の政党再編をにらんで、クロアチア・ブロック内部でラディッチの戦術に不満をもつクロアチア同盟のメンバーや急進党反主流派のストヤン・プロティッチとも非公式な接触をとっていた<sup>54</sup>。

この大会の最大の目玉は、党首のダヴィドヴィッチ始め民主党から多数のメンバーが参加を予定していたことであった。しかし、ダヴィドヴィッチ派の大会参加は、当然のことながら、プリビーチェヴィッチ派の大きな反発を招いた。大会の直前の1922年9月6日、党総務会で両派は衝突した。プリビーチェヴィッチは、大会の主催者は憲法修正の立場に立ち、また民主党の政策に反対する新党の結成をもくろんでいることを指摘して、ダヴィドヴィッチの大会への参加に強く反対した。彼によれば、大会に参加し、政府に不満をもつ者と談合することは、民主党のこれまでの政策の否

定を意味する。プリビーチェヴィッチは、もしダヴィドヴィッチとその他の党員が大会に参加するならば、自分は政府と党総務会に辞表を提出するとまで述べた<sup>55</sup>。これに対して、ダヴィドヴィッチは、大会参加の理由を次のように釈明した。この大会は何よりもセルビア人とクロアチア人が互いに歩み寄りを深め、クロアチア・ブロックのような民族主義ブロックの運動を粉砕することを目的としている。大会の主権者からは、大会の決議には憲法修正には言及しないと言質を得ている。それに自分たちは個人の資格で大会に参加するのであって、党を代表して大会に参加するのではない。この機会に様々な政党の代表と話し合うことは、連立政権の内部で急進党に対する民主党の地位を強化することにもなる。ダヴィドヴィッチはこのように述べて大会参加を正当化した<sup>56</sup>。

両派の議論の応酬は二日間続けられたが、会議は何の結論も出すことができなかった。総務会のメンバーが少数しかそろっていないということで、プリビーチェヴィッチが改めてメンバーを招集して議論をおこなうことを提案し、了承されたためである。しかし、このあとプリビーチェヴィッチおよび民主党の閣僚は、党総務会と議員クラブが決定を下すまで閣僚の仕事はできないと表明して、党総務会に進退伺いを提出した。これに対抗して、ダヴィドヴィッチも党総務会に党首の地位を辞任することを伝えた。これによって、ダヴィドヴィッチは民主党の党首としてではなく、個人の資格で大会に参加することにしたのである<sup>57</sup>。

1922年9月10日、知識人の大会がクロアチアの中心都市ザグレブで予定どおりに举行された。開会宣言をおこなったのはアンテ・パヴェリッチ（スタルチェヴィッチ権利党の元党首）であり、大会議長を務めたのはヨシプ・スモドラカであった。大会は2000名を超すクロアチア人およびセルビア人の知識人が参加して、一大イベントとなった。民主党からはダヴィドヴィッチを始め多数の党幹部が参加し、彼らは会議で積極的に発言して大きな存在感を示した。大会は決議を採択して表向きは成功裏に終わった。しかし、6月のイリジャ会議の決議に比べると、この大会の決議の内

容ははるかに控えめであり、何よりも問題解決の手段として現行憲法の見直しを求める提案は含まれていなかった。その理由は、プリビーチェヴィッチ派の批判をかかわすためにダヴィドヴィッチが大会参加の条件として憲法の修正要求を大会決議に盛り込まないことを求め、大会の実行委員会はこの要求に沿って事前に憲法修正に言及した文章を決議のテキストから削除していたからであった<sup>58</sup>。この結果、大会決議は政府に対する批判を直接的には述べず、クロアチア・ブロックの政策のみを反国家的な扇動として非難する点でバランスを欠くものとなった<sup>59</sup>。

## 5 ダヴィドヴィッチとラディッチの交渉

民主党ダヴィドヴィッチ派は、ザグレブでの知識人大会の前から無党派のクロアチア知識人の組織化を始めていたが、他方で彼らは、クロアチア・ブロック内の穏健派であるクロアチア同盟をクロアチア・ブロックから引き離すことをねらっていた。だがこれは成功しなかった。たしかにザグレブでの知識人の大会にはクロアチア同盟所属の政治家の参加もみられた。しかし、クロアチア同盟の指導部はクロアチア・ブロックから離脱することを拒んだ。むしろ彼らは、ダヴィドヴィッチがラディッチと直接に交渉することを求めた。クロアチア同盟指導部は両者の接触を積極的に仲介し、知識人の大会の直前にはダヴィドヴィッチ側近のパヴレ・アンジェリッチがザグレブを訪れ、ラディッチと会談した。もっとも、この会談は何の成果も生まなかった<sup>60</sup>。

ステパン・ラディッチは当初、ザグレブの知識人大会を冷淡な目で見ていた。彼は、このような運動はクロアチア人の利益にそむくことを強調し、クロアチア同盟の少なからぬメンバーがこの大会に参加したことを不愉快に思っていた。そのため、この運動を背後で操り、クロアチア同盟の引き離しを仕掛けていた民主党との交渉には積極的に気持ちになれなかったとみられる。だが、ラディッチの態度は9月下旬に突然変わった。民主

党との直接対話に応じるサインを示したのである。この知らせを受けて、ダヴィドヴィッチの使者アンジェリッチは再びザグレブに来訪し、10月5日、ラディッチを始めクロアチア・ブロックの幹部と話し合いをおこなった。

アンジェリッチは、クロアチア・ブロック幹部にダヴィドヴィッチの政局の見通しを伝えた。これに基づいて両者は協定書（プロトコル）を作成し、次の点を申し合わせた。1. 現在の政権はまもなく倒れ、総選挙が告示される。2. 選挙管理内閣にはおそらくダヴィドヴィッチが首班指名される。その場合、この内閣にはクロアチア・ブロックの同意のもとにクロアチア人の非議員3名が入閣する。3. この内閣の任務は、もっぱらクロアチア・ブロックとの協定の締結と自由選挙の実施にある。驚くべきことにラディッチはこれに加えて、10月23日に予定されているクマノヴォの戦い10周年記念式典に、クロアチア・ブロックの議員全員を参加させる意向を示した。クマノヴォの戦いとは、1912年のバルカン戦争でセルビア軍がトルコ軍に大打撃を与えたマケドニアでの戦いであり、その総指揮を執っていたのは現国王のアレクサンダルであった<sup>61</sup>。ラディッチが記念式典に来る可能性があることは翌日のベオグラードの新聞がスクープ記事として報道し、セルビアの人びとの間に大きな関心を引き起こした<sup>62</sup>。しかし、上述の協定書とラディッチの記念式典への参加はまもなくペンディングになり、共にリップサービスに終わった。民主党内で路線をめぐる議論が再開されたためである。

10月10日、民主党の総務会と議員クラブは合同会議を開いた。二日間続いた会議の議題は、「ヴィードヴダン憲法を擁護するか、それとも修正するのか」であり、その結果はクロアチア・ブロックとの交渉の行方に直接的に関わっていた。プリビーチェヴィッチ派の議員は、いわゆる「クロアチア問題」に関するこれまでの党の方針を擁護し、ヴィードヴダン憲法の修正には断固として反対した。彼らは、反政府勢力と連携しようとするダヴィドヴィッチの行動を、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ス

ロヴェニアにおける党の利益を損なうものとして非難した。これに対して、ダヴィドヴィッチ派の議員は、ヴィードヴダン憲法を擁護しつつも、戦術の転換を求めた。彼らによれば、クロアチア・ブロックとの交渉は政治勢力の新たな組み合わせを可能にし、それは急進党との関係で民主党の立場を強化することになる。最大の争点はどのような決議を出すかであった。ダヴィドヴィッチ派の議員は、ヴィードヴダン憲法にもとづき、国民と国家の一体性を損なわないという条件下で、セルビア・クロアチア関係の改善のために自由な行動をおこなう権限をダヴィドヴィッチに認めることを求めた。しかし、プリビーチェヴィッチ派が用意した決議案は、何よりも党の結束を求め、憲法の修正は国民と国家の一体性を危険にさらす試みであるとして、憲法と中央集権制を断固として擁護する闘いを継続することを強調するものであった<sup>63</sup>。

両派の主張は平行線をたどったが、決定的な対立にまでは発展しなかった。会議に参加した議員の間では、民主党の政治的影響力が低下することを恐れて、党の分裂を回避しようとする雰囲気は優勢であった。そのため、10月12日に採択された党決議は両派の主張を盛り込んだ妥協的な内容となった。この決議は、プリビーチェヴィッチ派の主張を取り入れて、ヴィードヴダン憲法の完全な実施を求め、あらゆる憲法修正の試みに反対するという前年の党大会で採択された決議を守ることを宣言した。他方、同じ決議は、ダヴィドヴィッチ派の主張に沿って、憲法にもとづき、国民と国家の一体性を損なわないという条件の下で、セルビア・クロアチア関係の改善のために自由に活動する権限を党首に認めていた。最後に決議は党の一致団結を確認した。会議の終わりに、9月の会議で党首のダヴィドヴィッチが提出していた辞表を党は受理しないという提案が出され、満場一致で採択された<sup>64</sup>。

会議のあと両派の指導者は共に決議の内容に満足していた。プリビーチェヴィッチはこの決議によってザグレブの知識人大会はあらゆる意義を失ったと述べた。なぜなら、彼の理解によれば、党決議はザグレブの知識



人大会の決議とはまったく別の路線を求めているからであった<sup>65</sup>。たしかに党決議は、ヴィードヴダン憲法の完全な実施を求め、あらゆる憲法修正の試みに反対することを述べた前年の党大会の決議を遵守することを求めている。しかしながら、党大会の決議には「この憲法の規定を実施に移すための所定の法律が制定されない限り」という但し書きが付いていた。ここでいう所定の法律、すなわち、国土の行政的分割を規定した行政区法はこの年の4月に制定されていた。したがって、この点では党決議は、憲法修正の問題を提起させる可能性をダヴィドヴィッチに与えていた。しかも、党決議はザグレブでの知識人の大会への民主党員の参加を非難せず、国政改善のために党首が自由活動をおこなうことを認めていたので、ダヴィドヴィッチはこれまでどおりクロアチアの反政府勢力と交渉をおこなうことが可能であった<sup>66</sup>。他方、党決議は、ヴィードヴダン憲法の遵守の点で政見を同じくするあらゆる政党と民主党は協力することができること述べており、この点では急進党との協力関係を深めるプリビーチェヴィッチ派の路線を正当化していた<sup>67</sup>。要するに10月12日の民主党決議は、政権の座にとどまるために、連立政権のパートナーである急進党との関係を引き続き維持することを否定しない一方で、別の政治勢力との新しい組み合わせを模索することも認めるという両にらみの路線を正当化するものであった。

民主党の議論の行方を見守っていたクロアチア・ブロックにとっては、このような決議は期待はずれであり、交渉促進に弾みをつけるものではなかった。ラディッチらは、民主党の分裂と連立政権の崩壊を、ダヴィドヴィッチらとの交渉の前提と考えていたからである。10月14日、クロアチア・ブロックは中央委員会を開いた。指導部が出した声明は、民主党決議に対する不満に満ちていた。それは、民主党の決議はクロアチア・ブロックに対する従来の強権政策を変えるものでないと批判し、ダヴィドヴィッチの妥協的な態度を理由に民主党代表との話し合いを打ち切ることを強調した。ところが、声明は別の箇所、セルビアの側に協定の締結を求める

政治集団がある限り、クロアチア・ブロックは政治協定を求める路線を継続する用意があることを述べていた。クロアチア・ブロックが公式の文書でセルビアの政治集団と対話を求めたのはこれが初めてであった。交渉の打ち切りを表明したラディッチの真意は、民主党ダヴィドヴィッチ派の生ぬるい態度を批判することであり、セルビア代表との協定締結の意欲は失われていなかったのである<sup>68</sup>。これを受けて、10月16日、ダヴィドヴィッチの使者のアンジェリッチはザグレブを訪れ、クロアチア・ブロック代表と意見交換をおこなった。両者はすぐに既定の方針を確認した<sup>69</sup>。

1922年11月、クロアチア・ブロックと民主党ダヴィドヴィッチ派は接触の頻度を高め、交渉を加速させた。その背景には内外の情勢の変化があった。内政面では、民主党プリビーチェヴィッチ派が急進党との連携を強めていたので、ダヴィドヴィッチ派はこれに打ち勝つためにはクロアチア・ブロックの協力がより必要になった。クロアチア・ブロックとしても、反クロアチア政策の元凶であるプリビーチェヴィッチ派が優勢になることは、黙って見過ごせないできない事態であった。国際情勢では、1922年10月31日、隣国イタリアでファシストの頭目ムッソリーニが政権の座に就いた。イタリアは1920年のラパロ条約に満足しておらず、ダルマチア地方に強い領土意欲を示していたが、その脅威はムッソリーニの政権獲得によっていっそう現実的になった。したがって、クロアチア・ブロック側には、国土の保全のために、セルビア代表とすみやかに協定を締結し、イタリアに対して南スラヴ人の一致結束を演出する必要があるがあった。

11月4日、ダヴィドヴィッチ側近のミラン・グロルとリュバ・ミハイロヴィッチがザグレブを訪れた。彼らはザグレブ在住の民主党員トミスラヴ・トムリエノヴィッチの仲介でただちにラディッチと会談した。彼らの来訪の目的は、ラディッチらを説得して、クロアチア・ブロック所属の議員をベオグラードに派遣させることであった。彼らは、クロアチア・ブロックの議員が議会に来なければ政権崩壊はあり得ないと述べて、ラディッチらに決断を促した<sup>70</sup>。ラディッチは、グロルとミハイロヴィッチ

の状況説明を聞いてベオグラードに行く決心を固めつつあったが、それでもなお重大な懸念を抱いていた。それは、クロアチア・ブロックのベオグラード来訪に対抗して、パシッチ政府が議会を解散し、総選挙を告示するのではないかということであった。国民議会は戦争傷痍者の補償に関する法律や行政職員の身分に関する法律、農民への融資に関する法律など国民生活に関わる重要な法案を審議中であった。議会が解散された場合、法案の審議は中断することになる。そうなれば、クロアチア・ブロックは、法案の成立を妨害するためだけにベオグラードに来たような印象を人びとに与えてしまう。これは選挙を控えてまずい。クロアチア・ブロックのねらいは、国家制度をめぐる交渉にセルビアの代表を引き出すことであった。したがって、たしかな展望もなく、政権打倒のためだけに欠席戦術の放棄という虎の子のカードを切ることには大きなリスクがあり、ラディッチは躊躇せざるをえなかった<sup>71</sup>。

11月6日開催のクロアチア・ブロック中央委員会は、ダヴィドヴィッチの使者からの要請を集中審議した。ラディッチはこう述べた。「国民議会への議員派遣に関しては、何よりもその前に、現在の政権が必ず崩壊し、そのあとにクロアチア問題の解決に真剣に取り組む意志のある公正な政権が必ず現れるという保証をベオグラードから取り付ける必要がある」。このような保証が得られた場合でも、ラディッチはすべての議員を一度にベオグラードに派遣するのは得策ではないと考えていた。最初の段階では63名の議員の中からクロアチア同盟の議員数名を送り、こののち10人程度のクロアチア共和農民党の議員を送り、必要に応じて増員する。最初に派遣された議員はセルビアの諸政党の代表と会談を重ね、セルビア人との協定のための受け入れ可能な条件ができたかどうかをザグレブに報告する。この報告を受けて、残りの議員全員の派遣に関する決定をおこなう。このようにラディッチは議員の派遣を慎重におこない、セルビア側の出方次第ではいつでも欠席戦術に戻る用意を崩さないでおこうとしていた<sup>72</sup>。

クロアチア・ブロックの議員を議会に派遣する条件として、ラディッチ

らがベオグラードから求めようとした保証とは、憲法上大きな権限をもつ国王が政権交代に反対しないということであった。なぜなら、クロアチア・ブロックの議員が議会に参加したとしても、国王が組閣を承認しなければ彼らが望むような政権は成立しないからであった。逆にパシッチ内閣が議会を解散しようとしても国王はこれに拒否権を行使することができた。国王は最後の鍵を握る人物であった。それゆえ、クロアチア・ブロックの指導部はクロアチア人および政権交代に対する国王の意向を知ろうとしたが、ダヴィドヴィッチの使者からは確たる情報をつかめないうでいた<sup>73</sup>。11月中旬、ラディッチは情報収集のためクロアチア・ブロック指導部の三人の幹部（マテ・ドリニコヴィッチ、ヨシプ・ブレダヴェツ、イワン・クリュネヴィッチ）をベオグラードに派遣した<sup>74</sup>。11月13日から15日、クロアチア・ブロックの三人の幹部は、民主党ダヴィドヴィッチ派の幹部のほか、ストヤン・プロティッチ、農業者党および共和党の指導者と会談をおこなった<sup>75</sup>。彼らはさらに、9月のザグレブ知識人大会に参加したセルビア人のグループ（「クロアチア人との協定を求めるセルビアの運動」）代表とも意見交換をした。こうした会談をとおして、クロアチア・ブロックの代表は、セルビアの諸代表と次の点で見解が一致したことをザグレブに報告した。それは現下の情勢はクロアチア人とセルビア人が政治同盟を結ぶことを求めており、セルビアの諸代表とクロアチア・ブロックの代表であるラディッチが参加する合同会談を近日中に開いて話し合いを継続することであった<sup>76</sup>。

事前協議の結果、この合同会談は11月26日、地理的にみてザグレブとベオグラードの間にある都市、スラヴォンスキー・ブロードで開催されることになった。この会談でラディッチは、現在のパシッチ＝プリビーチェヴィッチ政権を打倒し、これに代えて選挙管理内閣を組織することを、ダヴィドヴィッチおよびセルビアの野党指導者と合意する予定でいた<sup>77</sup>。ところが、会談の直前の11月24日、ダヴィドヴィッチの使者が急遽ザグレブに到来した。彼らはクロアチア・ブロック指導部にこう要請した。クロア

チア・ブロックは事前に何の協定を結ぶことなくベオグラードに来ることにしてほしい。そうでなければ、ダヴィドヴィッチは決起できない状況に追い込まれてしまう。憲法修正は可能であるが、時間をおいてから話題にしたい。それは今回の話し合いの正式な案件にはしてはならない。さらにダヴィドヴィッチから別の伝言が届いた。それは今回の会談では現在の政権の打倒を話し合うことはできないことを告げていた。他方、ストヤン・プロティッチは、会議をザグレブかベオグラードで開催すること、参加者は政党の指導者だけに限定することを提案し、自らはスラヴォンスキー・ブロード会議の出席を断った。ラディッチは、このようなセルビアの政治指導者の提案を承伏できなかった。彼はクロアチア共和農民党の拡大幹部会議を招集して、セルビア代表との会談をご破算にすることを決定した<sup>78</sup>。

しかし、ラディッチはなおセルビア側との交渉の継続を欲していた。11月26日、クロアチア・ブロック指導部は、「クロアチア問題を議会主義的方法で解決するための前提条件」を発表し、二つの条件を示した。一つは、セルビア側の交渉相手として、ヴィードヴダン憲法をいち早く批判してきたストヤン・プロティッチを筆頭に、最近数ヶ月現行の政権を公に批判しているセルビア人代表ならびにクロアチア人との協定を支持しているセルビア世論のあらゆる代表が参加することを求めた。もう一つは、彼らが、現在の政権を打倒し、クロアチア人との協定をおこなうための国民的な内閣を形成することで一致することを求めた。この内閣は、選挙管理内閣として、すみやかに選挙を告示し、自由選挙の準備のために、とりわけクロアチア、ダルマチア、ボスニアにおいて、行政機構を法律に基づいて改革し、強権的で腐敗した分子を権力から排除することとする。ラディッチが表向きプロティッチを交渉の相手として立てたのは、民主党党首のダヴィドヴィッチはその立場上、非公式に交渉をおこなっていることを配慮してのことであった。ラディッチが主要な交渉相手としたいのはやはりダヴィドヴィッチであった<sup>79</sup>。ラディッチは同日、ダヴィドヴィッチに宛てて手紙を書き、真意を説明した。その中で、ラディッチは、ダヴィドヴィッチ